

美學の基礎に就ての考察

深 田 康 算

テオフィール・ゴーチエの云つた語に『余は、其人に取りては見ゆる世界が存在する人間である』(… Je suis un homme pour qui le monde visible existe)と云ふのがある。『見ゆる世界』に住んでゐる人間と云ふ定義は、言語に依つて繪畫と同じ効果を與へようとの試み(彼の所謂 *transpositions d'art*)を爲した彼自身に最も能く適する語であるのは云ふまでもないが、恐らくは之れを總べての藝術家に移して云ふことも出来るのではあるまいか。記號としてか若しくは道具としてか、兎に角唯或他の目的の爲めに役立てられるものとしてのみ感覺世界を見做して居る理論家及び實際家と異なつて、感覺世界が夫自らとして價値と意義とを有すると見て居るもの、而して其人に取りては『見ゆる世界』が夫自らの爲に『存在する』のは、即ち藝術家であると云へないであらうか。此『見ゆる世界』にも或種の統一があり、或種の意味はある。然し夫れは夫れ自らに特有な例へばデッサアの呼んでゐる如き『觀照的必然』(*Anschauliche Notwendigkeit*)

であつて、所謂形式の持つてゐる統一でもなく、又所謂内容の持つてゐる意味でもあり得ない。寧ろ『見ゆる世界』が記號として若しくは道具としてではなく、夫自ら特に持つて居る統一と意味とは、之れを夫自らとして見ることの出来ない者——換言すれば、其人に取つては『見ゆる世界』が存在せぬ人々——の側から云へば統一でもなく又意味でもないものなのである。其所に『藝術は唯藝術家に依りてのみ理解せらる』と云ふ意を述べてゐるデューラーの語の眞意があり、又上に引いたゴッテューの語の前半に於て『余に對する非難及び賞賛の中一つとして余の眞價に觸れてゐるものはない。誰も余が如何なる人間なるかを理解して呉れぬ』と云つてゐる彼の嘆きの深い理由が存する。『見ゆる世界』が唯一の、若しくは眞實の、と云へない迄も、少くとも尙讓歩して附け加へて云へば、或意味に於て直接に與へられたる世界であるとは、何人も否定しはしまい。其所から出發した吾々は、多くは忽ちにして此世界を記號化し、又道具化して、云はゞ之れを出来る丈け吾々から遠い距離に押し除けようと試みる結果、『見ゆる世界』の意味なり統一なりを、記號として若しくは道具として夫れが有する夫れとしての外、全くこれを考へず、又考へ得ぬに至るのが常である。藝術を遊戲と解し、美を假象と見んとするもの、美的對象の本質を形式に在りと云ひ又内容に在

りといふ議論の如き、皆此遠視眼とも名づけ得べき吾々の心の病に侵された者の美學上の見解であると云へる。

『見ゆる世界』の夫自らの存在なり價值なりから、藝術の本質を理解しようとする者は、純粹なる感覺とか、純粹なる形式とかの語を用ゐて、誤解を避けようとするに拘はらず、所謂形式説や所謂感覺説と同巧異曲なものに過ぎぬと認定されてしまふ憂はある。藝術學の主張に正當の讓歩を敢えてする美學が哲學としての權威を捨てるかの如くに見られ、精神と肉體との離る可らざる關係を力説することが唯物論と同一視せらるる如くに——其外幾多の説が『哲學史』に於て葬り去られた『古い』學説の粧のみを改めた復活であるとせられ易きが如くに、大同小異として掃き去らるることは免れ難い新説のハンデキャップであらう。然し其所には云ふ迄もなく常に緩めてはならぬ所の反省の手綱が必要である。

美學史の上に於て形式説と内容説との論争は已に過去に屬すると云へやう。理智的に計算し得る整つた形式を美の根柢と見る形式説と感覺的要素を或概念的内容の衣服に過ぎぬと見る内容説との對立や、之れを調和せんとする試みとしての直接要素と聯想要素との併立(フヒネル)若しくは形式と内容との單なる融合の主張は、

吾々に取つては皆試みられたる失敗の跡を示すものとしてののみ興味を有するに過ぎない。勿論美的對象の形式的方面と内容的方面とに關する夫々綿密な分析的研究は極めて必要な研究である。形式説及内容説の論争は、其企圖せられざりし結果として、是等の研究方面を開封した點に於て、確かに無意義ではなかつたと云ふべきであらう。而して美的對象に具有せられて居ると見られた此二つの側面に就ての夫々の考察は、美的對象の客觀的側面及主觀的側面に關する研究と共に、其考察の進むに隨つて、當然此異種類な——表裏の二面の如くに別でありながら合せられて居る——二つの要素が、如何にして一つに結び合つて居るかの問題に立ち歸らなければならぬ故に、彼の論争は——夫れが今も尙ほ響が傳はつて居る位、騒がしかつた丈夫れ丈——其間接のではあるが結果として、美的對象の本質に關する吾々の思索を深からしめたと云ふべきであらう。美的對象に就ての吾々の素朴なる考へ方も亦多くは形式と内容との區別から出立して、終には此區別の立場から云ふ形式でもなく、又内容でもない所の或物に落ち付くのを常として居る様に見える。然し考へ方の十分に行き涉らざる爲めと、言語の不足に満足してゐる爲めとに依つて、吾々は多くは、此落ち付き場所を手短に或は形式であるとも云ひ、或は内容であるとも云

つて、日常の會話には差支を感じずに済ませる。其際もし吾々の考へ方を押し進めて行くならば、恐らくは之れを押し進める力の積極的なものは形式の方面より與へられるものであり、消極的なものは内容の方面から與へられるものであることに氣が附くであらう。而して其處に『見ゆる世界』の存在、感覺の獨自の意義及び純粹なる形の特種の意味に就ての新らしき思索が生れるであらう。

〔附〕上に引用したゴーチエー及びヂューラーの語は、其出所を一々明記するのはあまりにペダンチックであるのを恐れる程有名である。然し其原文を此所に附記することは、譯文の不完全なる姿を補ふ丈けでも十分正當な理由があると思はれる。

“Critiques et louanges me louent et m'abiment sans comprendre un mot de ce que je suis. Toute ma valeur, ils n'ont jamais parlé de cela, c'est que je suis un homme pour qui le monde visible existe.” (Théophile Gautier)

“Die Kunst des Malens kann nicht wohl beurteilt werden, denn allein durch die die du selbst gute Maler sind, aber fürwahr den anderen ist es verlogen, wie dir eine fremde Sprache.” (Albrecht Dürer)

是等の語に對する時吾々はモイマンが藝術創作の理解を以て美學の最も困難なる問題であるとして、擧げて居る四個の理由を、必しも平凡極まる議論とは思はないやうになるであらう。(モイマン『現代美學』第二版九四—九五頁參照)

此新らしき思索へ吾々を導くものは、美的對象の特性に就ての止む能はざる吾々の注目に根ざして、自ら二つの途に分れる。一は藝術の觀照及創造の二面に就ての考察から、藝術的活動(Künstlerische Tätigkeit)の理解に向ふもの、一は美學の學的性質に就ての考察から、美學は如何にして學として可能なりや(Aesthetik als Wissenschaft)を明かせんとするもの、此二つの途からの研究は藝術に就ての興味と學術に就ての興味とに基くものとして、夫々全く別々な方面を歩む者であるが、其指し示めす方向は一つの點に向つて居る。例へばフィードラーが造形的藝術家の特性を『眼に依れる感覺の作用を見ゆる表現の側に於て、獨立の發展に導く能力』に在りとせる如き(Fähigkeit, den Vorgang der Wahrnehmung durch das Auge nach Seite des sichtbaren Ausdrucks einer selbständigen Entwicklung zuzuführen." K. Fiedler, Schriften über Kunst, I., 1913, S. 290)モイマンが『學としての美學は唯認識論の一部としてのみ可能である。而して其記述は唯現象學的にの

み可能である』といふが如き(『Aesthetik als Wissenschaft ist nur möglich als Teil der Erkenntnistheorie, und ihre Beschreibungen sind nur phänomenologisch möglich. "R. Hamann, Zur Begründung der Aesthetik, Zeitschr. f. Aesthetik u. allgem. Kunstwiss. Bd. X., S. 123) 前者は造形藝術殊に繪畫に就ての深い興味から、藝術の本質に關する理解を其樂受の方面からでなく、寧ろ其創作活動の特殊の態度の考察に依つて擧取したものと云ふことが出來、後者は所謂先驗的心理學の立場から、一科の學を學として可能ならしめる原理に就て考察し、之れに基ゐて一の新たななる *modus intellectualis* を造らんとする試みである。而して兩者の興味と思索の方法との差異の可なり大なるに拘はらず(但し兩者の背後に共通の原動力とも云ふべきカントの精神が働いて居ることは明かであるが)其到達點に於て、共に『見ゆる世界』の存在、感覺の獨自の意義、及び純粹なる形の特殊の意味を認める點に於て一致して居ることは、極めて興味ある事實と云はざるを得なす。

フィドラーの事は今暫らく措く。以下少しくリヒャルド・ハーマンが『美學及一般藝術學雜誌』一九一五年四月號に載せた『美學の基礎附けに就て』と云ふ論文に就て叙述を試みよう。

〔附〕 フィードラーの見解に就ての色々な意味で興味ある短評はフォルケルト『美學體系』第三卷二二六—二二七頁に見出される。

彫刻家ヒルデブラントが『形の問題』(Adolf Hildebrand, Problem der Form in der Bildenden Kunst, 6. Aufl. 1908) に於て説いて居る所が、フィードラーの説に似通へる點の多いことは人の知る通りである。序ながら、ヒルデブラントが説いて居る造形藝術に於ける Fernbild の説を、アロイス・リールは、所謂形式説に取つて最も大なる困難を提供する所の文學に適用して das zeitliche Fernbild der Erinnerung を論じて居る (A. Riehl, Bemerkungen zu dem Problem der Form in der Dichtkunst, Vierteljahrsschrift für wissenschaftl. Philosophie, Bd XXI. (1897) S. 283-306, Bd XXII. (1898) S. 96-114.) 又ヒルデブラントの説を通俗的に叙述し多くの例證を擧げて居るものには、コルネーリウスの『造形藝術の基本原則』(H. Cornelius, Elementar-gesetze der bildenden Kunst, 1908) がある。尚モイマンはヒルデブラントの Fernbild 説を心理學上誤りであると斷言して居るが其理由は全く述べて居らない。又テオドル・マイヤーはリールの試みを非難して居る。

ハーマンの美學上の述作に就ては、私の知つてゐる限りでは、著書としては『生

活と藝術とに於ける印象主義』(Der Impressionismus in Leben und Kunst, 1907)及び『美學』(Aesthetik, 1911)があり、論文としては Zeitschrift für Aesthetik und Allgem. Kunstwissenschaft 誌上に三四篇載せられて居る。

ハーマンの(以下敘述しようとする論文の立場を先づ豫め知るのには、デッサンが其『美學及び藝術學』(七二—七四頁)に於て、美學上の感覺説に關して述べて居る所が最も都合のよい手引であると思はれる。デッサンは云ふ『感覺主義の正當なりや否やを檢して見るに、先づ第一には、此主義は今日多くの人々の間に承認せられてゐる所の認識論上の根本思想と容易に一致せしめることが出来る。夫れに従へば、我と外界との關係の問題は多くは次の如くに解決せられて居る。即ち吾々は、吾々の觀念が夫れに該當するのであると考へられる如き外物として、物を經驗するのではない。寧ろ、例へば一つの聽かれた音は物的であると同時に心的である。又意識内容も例へば先づ主觀的なるものとして經驗せられると云ふ如きものではなくして、寧ろ、主觀的なるものと區別せられず、唯現にある所の現實として經驗せられるのであると。斯く觀念的對象に於て此無差別があること、感覺に於て他と我とが本來合一して居ること——是等の

ことは、美的態度に於て如何程大なる役目が感覺に屬するかを明示して居るものである。』

ハーマンの論文は、第一章『方法』(Methode)第二章『美學の原理』及び美的形象に就ての概念の現象學的構成の原理』(Prinzipien der Aesthetik und phänomenologischen Begriffsbildung für aesthetische Gebilde)の二章に分れて居る。然し今私は便宜上之れを尙細かな部分に分解して敘述及び批評しようと思ふ。

一 反應學と純粹記述學

客觀界と主觀界とに別たれて居り、空間と時間とに依つて一定の妥當な秩序に結合せられて居る所の世界に吾々は住んで居る。而して吾々の認識や意志や感情は皆此世界に關係して働いて居る。例へば吾々は客觀界に就て其個々が如何なる性質を有するか相互の間に如何なる作用が行はれて居るかを知らうと努める。又夫等の客觀に對して、之れを受け入れる所の主觀が如何なる關係に立つか。主觀が感

覺に依り意志に依り若しくは感情に依つて、客觀を占有する時に、恒久不變なる客觀の諸性質が主觀に依つて如何に變更せらるゝか。主觀が客觀を斯く變更し得る爲めには、主觀其者及び個々の主觀者たる個人は果して如何なる特殊の能力若しくは性質を具有すと考へられなければならぬか。是等を吾々は知らうと努める。現實世界の認識と叫ばるゝ總ての吾々の認識は、夫故に、主觀界と客觀界とに、換言すれば物心的性質を有するものに、關係して居ると云ふことを前提して居る。斯くして吾々の認識は、一方に於ては、物が如何なる性質を有するやに關し、一方に於ては、主觀者が如何なる性質を有するやに關するに隨つて、自然學若しくは心理學を構成するのである。然しながら總て吾々の認識が斯の如く自然に就ての經驗若しくは心理に就ての認識と云ふ形を取るに至る爲めには、何が前提せられて居らなければならぬか。自然と云ひ心理と云ひ、主觀と云ひ客觀と云ふ、夫等に就ての經驗なり、認識なりを云々する前に、是等のものが一體何であるかを吾々は問はなければならぬ。自然に就て若しくは心理に就て、客觀界に就て若しくは主觀界に就ての認識があり得る前、換言すれば、自然科學經驗と心理學的經驗とがあり得るに先つて、如何なる經驗があつたと考へなければならぬか。此問題を吾々はカントよりして以後始めて考へ

るやうになつた。何故なればカントよりして後に始めて、吾々の最も直接なる經驗、直接に與へらるゝ所のもの、若しくは絶對的現實なるものは、尙未だ現實世界の認識ではないものであること、即ち自然とか精神とか、主觀とか客觀とかを意味しないものであることが明かになつたからである。吾々が自然と精神との概念に依つて意味する所のもの、吾々が自然と云ひ精神と呼ぶ所のものは、直接に與へられて居るものではなく、直接に經驗せられるものではなくして、實は先驗的なるものである。

之に於て先づ必然に起つて來る問題は、何故に吾々は直接經驗に立止まつては居らないのであるか。何故に吾々は直接經驗のまゝを記述することをせず、何が吾々をして此經驗を、主客兩觀を區別する經驗の形、物心二元的なる現實界の形に改めしめるべく餘儀なくするのであるか。主客と云ひ物心と云ふ概念は何を意味するのであるかと云ふ問題である。而して之れを解く任務は認識論に屬する。次ぎには又如何なる原理に従つて、直接に與へられたるものが現實的經驗に變形せらるゝか。直接に與へられたるものゝ中に、如何なる必然的關係が存在するに依つて、此變形が生ずるのであるかの問題が起る。而して之れは現象學の問題である。

例へば甲が乙に傷害を加へて居る場合に吾々が出遇つて、之れを目撃するとする。

其際直接に與へられて居る所のものは、見られたるものとして吾々が經驗する所のものに外ならない。然るに此直接なる經驗を、吾々は或は單に運動の連續、位置の變化、力の測量し得べき開展等として、純自然科学的に記述することも出来る。或は甲の暴力や惡意、乙の怯懦、若しくは無辜等の表現として、道德的又は法律的意味を有するものとして、記述することも出来る。或は乙の負傷若しくは生命の危險又は甲の狂氣として、醫學上の概念に基いて之れを記述することも出来る。是等の種々の記述は、夫々別種の範疇の下に一個の對象が置かれるが爲めに生ずるのであつて、同一の與件の上に、概念に基いて、諸種の客觀的性質が構成せられたのである。直接には同一なる經驗として與へられたるものを、斯く諸種の夫々異なりたる意味の領域に分つ所の原理は何であるか。自然科学、醫學及び倫理學上の概念とは果して何を意味するのであるか。

之れを現象學的に考察して、一方に於ては直接に與へられたるもの、他方に於ては概念及概念に規定せられ之に従ひ來るもの、此兩者の間に存在する必然の關係を闡明しようとして試みるならば、恐らくは、概念に依つて規定せらるゝものは、皆究竟とか、目的とか若しくは實踐とか呼ばるゝものを含む若しくは前提するを發見するであ

らう。種々なる意味の領域とは、即ち種々なる實踐の分野に外ならない。之に適はせんが爲めに概念は已に早く、直接の經驗を一定の客觀的對象の經驗に變形するのである。一見純粹なる如くに見える認識の中に、已に一の(實踐的)目的が横はつて居る。概念は已に一定の方向に向つての反動なのであると云ふべきであらう。而して直接に與へられたるものが、概念の助けに依つて、諸種の經驗領域に組み込まれる時、其諸領域の一つの中に於て如何なる地位を占むべきか、若しくは其領域の任意の或一つの中に組み込まれ得べきか否かは、云ふ迄もなく、直接に與へられたるものが自ら之れを規定する。然しながら直接に與へられたるもの夫自には、彼經驗領域の孰れか一つに必ず組み込まれなければならぬと云ふ必然性は無い。之れを經驗領域の孰れか一つに組み込む所ものは、寧ろ概念の側に存在する所の上(に云へる)目的である。此目的(勿論目的である故に之れを欲すると否とに依つて立てられ又棄てられ得る)は夫故に經驗を可能ならしめる所の前提である。而して直接の經驗からは全く獨立なるもの、即ち之に取りてはアプリアオリなるものである。

換言すれば、吾々は先驗的なる目的及び概念に従つて、直接なる經驗を、現實的物心的經驗の諸領域若しくは體系に組み立てるのである。斯くの如く經驗の前提は目

的に依つて規定せられ、實踐の境涯に屬するのである故に、客觀的對象の認識の總てに於て、カントの所謂「實踐理性の優位」は承認せられる。客觀的對象の認識である是等の學問及び其概念を反應的(reagierende)と呼ぶことが出来る。之れに反して、(實踐的)目的に關係なく、直接に經驗せらるゝ所のものを其儘記述する學問がありとすれば、夫れは即ち現象學と云ふべきであらう。而して夫れは反應的でなくして、純粹記述學(rein beschreibende Wissenschaft)であらう。

自然科學は決して此の如き純粹記述學ではない。寧ろ反應學に屬することを注意すべきである。何故ならば、其基本概念たる物體、空間、運動は總ての實踐に土臺を與へるものである。是等の概念に依つて、直接に與へられたるもの、例へば見られたるもの若しくは觸はられたるものは、攫かむことの出来ること、即ち筋肉的(運動)神經的(反應)に關係せしめられて居る。而して筋肉的(運動)反應(motorische Reaktionen)がなければ、實踐は有り得ないからである。夫故に自然科學的記述に於ては、主觀は唯空間に存在する一つの本體としてのみ規定せられ、反應的諸學の取扱ふ總ての主觀的屬性は盡く皆此空間的本體としての主觀に關係してのみ意味を持つて居るのである。

上述の如くに反應學と純粹記述學とを區別し得るならば、美學は此孰れに屬すべ

48

き學と考ふべきであるか。美學は吾々の知つて居る總ての經驗學(即ち反應學)の領域の孰れか一つに屬すると云ひ得るであらうか。美學に於ける概念構成の様式は夫等の諸科學に於ける概念構成の原理と同一であらうか。自然科學で云ふ『物』や、心理學で云ふ『心』や、醫學で云ふ疾病及健康、倫理學で云ふ罪過及純潔などの意味(Bedeutung)が確定して居る様に、美學が用ゐて居る概念の意味は確定して居ると云ひ得るであらうか。而して夫故に美學は是等の經驗的科學と同様に、概念に基ゐて、夫等の領域に屬する經驗から(即ち純粹に經驗的に)美若しくは美醜と呼べるゝ性質を規定し得ると云へるであらうか。(未完)